

した人格的要素は、ここでは単なる“ノイズ”となる。より端的に言えば、ここでは互いが無理をして「相手を知る」必要などない。逆にそれゆえ、互いにまったくの初対面であったとしても、われわれは簡単に〈関係性〉を成立させ、円滑な相互作用を実現することができるのである。

もちろん「財やサービスの提供者」と「財やサービスの消費者」という〈間柄〉は、後に見るように、一元的な「形式化」を強力に引き起こすという意味において、〈間柄〉の事例としては極端なものだと言えるかもしれない。実際、「私」がある人物と対面するとき、そこで働く〈間柄〉は、同僚であると同時に、趣味を共有する友人でもあり、さらには同じ高校時代の記憶を共有する同窓生であるかもしれない。このように現実の〈関係性〉においては、われわれは日々多様な〈間柄〉を——言語化されていないきわめて微細なものも含めて——幾重にも活用して生きている。そして多人数で行動する場合には、われわれはその場の状況や構成員の形によって、最も大きな意味を持つ〈間柄〉を柔軟に切り替えながら過ごしているとも言えるだろう。いずれにせよ、〈間柄〉という仕組みが存在することによって、「実像-写像」の「内的緊張」がもたらす負担は大幅に軽減される。〈生〉の実践に不可欠となるさまざまな集团的営為は、いわばこうして維持されてきたのである。ミードらが「一般化された他者」と呼んできたものは、ここではわれわれが行使可能な〈間柄〉の集合体という形で再定義されることになるだろう。

(4) 「人間的〈関係性〉」における〈距離〉の概念

とはいえ、「人間的〈関係性〉」をめぐるわれわれの議論においては、依然として考慮すべき問題が残されている。それは〈間柄〉が「形式化」によって〈関係性〉の負担を軽減する一方で、別の文脈においては、まったく新たな「内的緊張」をもたらすことになるからである。

このことを再び「財やサービスの提供者」と「財やサービスの消費者」という〈関係性〉から考えてみよう。前述したように、この〈間柄〉においては、そのきわめて強力な「形式化」によって、われわれは互いの人格的要素を無視

したままでも容易に〈関係性〉を構築できる。しかしもしここで、われわれにとってすべての〈関係性〉が、こうした〈間柄〉のみによって完結するものだったとしたらどうだろう。われわれの〈関係性〉は、おそらく苦しみに満ちたものになるはずである。強力な「形式化」が働くということは、逆から見れば、互いの背景にある「〈関係性〉の場」も、互いの「〈我-汝〉の構造」も、ここでは一切が考慮されないということの意味する。われわれは先に〈自己存在〉は、〈他者存在〉との「〈我-汝〉の構造」——語りかけてくる〈他者存在〉に対する応答——を通じて、はじめて「私」になれると述べてきた。こうした状況下においては、〈関係性〉の“意味”は著しく矮小なものとなり、〈自己存在〉はきわめて浅薄なものにならざるをえないからである。

この〈間柄〉がもたらす新たな苦しみは、多くの場合〈間柄〉が外的なもの、すなわち自らが関与しえない、生受の条件や、周囲の状況によって付与されるものであることにも一因がある。そこではひとりひとりの人間の意思、あるいは「〈関係性〉の場」や「〈我-汝〉の構造」が素通りされ、画一的な形で〈関係性〉の“意味”が規定されてしまうからである。実際われわれは、偏見、レッテル、ラベルといった言葉が象徴するように、しばしば特定のステレオタイプからの類推によって、他人の振る舞いを解釈したり、判断したりすることに注意を払う。そのときわれわれが警戒しているのは、実は〈間柄〉が持つこうした側面なのである。

しかしそれでは、〈間柄〉は、なければならないほど良いのだろうか。そうではないのである。これまで見てきたように、〈間柄〉がなければ、われわれは複雑な〈関係性〉の網の目のなかを生きていくことなどできない。〈間柄〉なき世界においては、われわれは、その余りに膨大な配慮すべき事柄、そして不確かな事柄に押しつぶされ、やがては〈関係性〉を構築すること自体の負担に耐えられなくなるだろう⁽²⁸⁾。他方で〈間柄〉は、決して“不変”のものではない。例えば前述のブルーマーは、社会的な意味（有意味なシンボル）が持つ流動性について指摘している。すなわち人間は、相互作用によって常に新たな意味を構築していく存在であり、そうした人間自身の主体的な相互作用が生みだす過程そのものが、われわれにとっての社会であるというようにである⁽²⁹⁾。このことが示

唆しているのは、〈間柄〉は修整可能なものであるということである。実際われわれは〈関係性〉の営為の中で、常に新たな〈間柄〉の枠組みを生みだしながら、そして常に具体的な〈間柄規定〉の内容を再構築しながら〈生〉を実現している。ただし、集団的に共有された〈間柄〉が更新されていくには、それ相応の時間を要することも確かである。むやみに変質してしまう〈間柄規定〉であるならば、それはそもそも〈間柄〉としては機能しえないはずだからである。

以上の考察から理解できるのは、次のことであろう。つまりわれわれが円滑に〈関係性〉を構築するためには、〈間柄〉が不可欠であるが、その仕組みの恩恵を皆が受けるためには、人間はときに、自らの望まない〈間柄〉を受け入れなければならない場面や、その〈間柄規定〉にしたがって、望まない振る舞いを行わなければならない場面があるということ、それでもなお、それがあまりに徹底したものとなると、人間は自らの〈存在の強度〉を保つことができなくなる、というジレンマに他ならない。本書では、このことを〈間柄〉がもたらす第二の「内的緊張」と呼ぶことにしたい。

だが、注目したいのは次の点である。すなわち過去から現在に至るまで、実際には、「人間的〈関係性〉」のすべてが、〈間柄〉によって塗り潰されたものだったわけでは決してないということである⁽³⁰⁾。常々人間は、〈間柄〉のなかにあっても、ときに〈間柄〉の構えを解き、そこに再び「〈我-汝〉の構造」を呼び覚ますことによって、〈関係性〉に深い色彩を与えながら生きてきた。その側面を理解することによってはじめて、われわれは「人間的〈関係性〉」の全体像を掌握することができるようになるのである。

そこで本書では、ここで新たに〈関係性〉の〈距離〉という概念を導入してみることにしたい。まず代表的な辞書によれば、「距離」とは、「二つのものや場所の間のへだたり」を指す概念である⁽³¹⁾。「間」も「隔たり」も、二つ以上の何ものかの関係性を問題としており、加えてわれわれは、それを空間的な隔たりという意味だけでなく、特定の〈関係性〉を指して「距離が近い／遠い」と言うように、比喩的な意味での「人ととのつきあいの上でのへだたり」、人と人との間にある心理的な隔たりという意味でも用いている⁽³²⁾。確かに、われわれがこれまで用いてきた〈間柄〉の概念もまた、「人と人との間」を表すもので

あった。しかし〈間柄〉の概念は、特定の〈関係性〉を抽象化したものに過ぎず、そこには「人と人との間」に本来存在するはずの、尺度としての距離という側面が十分に汲み取られていない。ここで整備したいのは、〈関係性〉を制御する〈間柄〉とは別の仕組みとしての、〈距離〉の概念なのである。

もっとも〈関係性〉の原理としての〈距離〉の概念は、他の概念と比較して、これまで十分な研究がなされてきたとは言いがたい。例えば社会学には、「役割距離」(role distance)という概念が存在する。これはE・ゴッフマン(E. Goffman)が提唱したものであり、例えば反抗的な若者が行う非行、医者が手術中に発する冗談のように、特定の社会的状況下において、期待される振る舞いとは異なる行為を敢えて行うといった、一種の逸脱のことを指している⁽³³⁾。しかしゴッフマンが問題にしている距離とは、あくまで求められる振る舞いと実際に行われた振る舞いの隔たりであって、われわれが問題にしている「人と人との間」にある「隔たり」のことではない。ここで重要なことは、むしろわれわれが先に、人間は〈間柄〉のなかにあっても、ときに敢えて〈間柄〉の「構えを解く」と述べたことの意味である⁽³⁴⁾。例えばあるプロジェクトに参加する人間が、わけあって関係機関の担当者と交渉する場面を想像してみたい。ここで両者の〈間柄〉は、まずは互いの組織の代表者という形で規定される。しかしこうしたとき、われわれが敢えて会食の場を設けたり、プロジェクトとは無関係な個人的な話題を交わしたりするのはなぜなのだろうか。それは先の「役割距離」として規定される逸脱とはまったく異なる。それはわれわれが、互いに〈間柄〉としてではなく、まさに「相手を知る」ことを通じて、しばしばより意義のある交渉結果を導くことができることを知っているからである。人間の〈関係性〉には、ときに互いが背負う「〈関係性〉の場」に触れ、〈我-汝〉として向き合うこと、換言すれば〈間柄〉の背後にある「私」の顔を互いに表出することによって、はじめて掴み取れる“真意”というものがあるからである。

本書ではこうした行為のことを、〈間柄〉による「形式化」に対応させる形で、〈関係性〉の「脱形式化」と呼ぶことにしたい。人間は〈間柄〉を必要とするが、同時に〈間柄〉の「構えを解く」ことを通じて、ときにより円滑な〈関係性〉を構築することができるのである。もっとも「構えを解く」ことは、〈間

柄)が無効になるということを決して意味しない。たとえいかなる「相手」であったとしても、われわれは依然として何らかの〈間柄〉に服していなければ〈関係性〉を維持することはできない⁽³⁵⁾。つまり〈関係性〉において「脱形式化」が意義あるものとなるためには、その前提として、あくまで〈間柄〉による「形式化」が不可欠なのである。

要するに、ここで導入したい〈距離〉の概念とは、この「脱形式化」を行う“度合い”を表す概念に他ならない⁽³⁶⁾。例えばわれわれが「距離が近い関係性」と言う場合、それは両者が単に〈間柄〉で完結した仲ではなく、より多くの局面において「〈我-汝〉の構造」を介して向き合っていることを意味している。逆に「距離が遠い関係性」と言う場合、それは両者がより多くの局面において、「〈我-汝〉の構造」を介さず、〈間柄〉に従って向き合っている、ということの意味しているのである。そしてこの「脱形式化」によって、われわれは〈間柄〉がもたらす第二の「内的緊張」を緩和させることができるようになるだろう。例えばわれわれは、〈間柄〉の背後に隠れていた「私」を表出させることによって、望まぬ〈間柄〉や不適切な〈間柄規定〉との隔たりを示すことができる。それは互いが〈間柄〉の形をより良い形に修整していく契機にもなるだろう。

ただし「脱形式化」を行い、「〈我-汝〉の構造」を持ちだすことは、われわれが再び「実像-写像」の「内的緊張」に直面することをも意味している。そしてわれわれが〈距離〉を活用するとき、「私」が理解し、望んでいる「距離間」と、「相手」が理解し、望んでいる「距離間」との間には、やはり不一致が生じる余地がある。つまり「私」がどれほど「構えを解く」ことを望んでいても、「相手」がそれを望まないのであれば、そのことがかえって〈関係性〉を不安定なものにさせるだろう。本書ではそのことを、〈距離〉がもたらす第三の「内的緊張」と呼ぶことにしたい。

(5) 「ゼロ属性の倫理」と「意のままになる他者」

さて、われわれは以上を通じて、「人間的〈関係性〉」の構造についての一通りの説明を行ってきたことになる(図5)。以上の議論から見えてくるのは、次